

サービスマーケティングにおけるCOMMON RUBRICの検討

白井 靖敏・鷺尾 敦*・原田 妙子

Consideration of Common Rubric for Service Learning

Yasutoshi SHIRAI, Atsushi WASHIO and Taeko HARADA

1. 目的

サービスマーケティング(社会貢献学習)は、前報¹⁻²⁾で述べたように、大学で学んだ知識や技術を社会的活動に生かすことを通して、市民的責任や社会的役割を感じ、実践力を養うことを目的とした教育方法として一般的に定義されている。もとは、経験学習の伝統のあるアメリカにおいて発展した教育形態であり、今や、全米950以上の大学でサービスマーケティングが取り組まれていると言われている³⁾。また、国内においても導入が進んでおり、山田は、その導入・実践事例を紹介している⁴⁾。本学では、短期大学部において、平成25年度からの学科改組にともない正課の授業「地域貢献演習」(地域貢献入門演習(1年前期)・地域貢献基礎演習(1年後期)・地域貢献実践演習(2年前期)・地域貢献応用演習(2年後期))を導入している⁵⁾。高田短期大学では、正課外ではあるが、平成21年度より、地域ボランティアと学生による「シニアパソコン教室」の運営活動などを展開してきている⁶⁾。

サービスマーケティングは、学生と地域社会との協働プロジェクトの形で行われることから、社会人と学生との良好な人間関係を築く力、特に協働でプロジェクトを進めていくための汎用力(ジェネリックスキルズ)を身に付けられる点で大変重要な教育実践といえよう。学習では、実践的にこれらの能力を獲得することができ、教室で得た知識と社会実践とをリンクさせる重要な役割を果たすとともに、学生が実社会へ出て、直接的に役立つ能力として、社会人基礎力⁷⁾を身に付ける意味においても重要である。しかし、教育効果は高いと予想されるものの、サービスマーケティングの手法や効果の測定をしっかりと設計しないと学修成果を明確にできない。特に、正課授業として組み入れた場合は、このことがより重要となる。本学の実践例のなかにはボランティア活動に参加してそれが証明されれば単位が認定されるケースや、文学部の国際英語学科が平成21年度から導入した「社会体験1(ボランティア)」では、詳細な運用方法、指導方法について明確な取り決めがなされず十分な実質化ができないまま、その目的「ボランティア活動を通して、人間関係のあり方を学ぶとともに、社会貢献の意義について理解を深めることとする」が達成されたかが十分検証できなかったケースがある⁸⁾。

そこで、本研究では、学生がサービスマーケティングを通して得られる汎用力の獲得状況を測定・評価する指標としてルーブリックと学修ポートフォリオを開発している。開発にあたっては、

* 高田短期大学

高田短期大学で実践している地域ボランティアと学生による「シニアパソコン教室」の運営活動と、名古屋女子大学短期大学部で実施している「地域貢献演習」の活動のなかで、地域主催者とスタッフ、講座受講者、および、学生へのアンケート調査結果を利用した¹⁾。成果測定・評価の指標として、OECDのキー・コンピテンシー⁹⁾、社会人基礎力(3能力12要素)⁷⁾、学士力(4分野13項目)¹⁰⁾を参考に22項目にまとめた¹⁾。

これらの指標について、高田短期大学では講座を主催している主催者(公民館職員)と講座を実際に運営しているスタッフに、名古屋女子大学短期大学部では地域主催者に対して、「学生に期待する能力」「この活動を通じて学生が学ぶ能力」を、それぞれの講座受講者には「学生に期待する能力」を、学生には「この活動について評価をしてほしい能力」について調査した。これらの結果をもとにループリックと学修ポートフォリオを昨年度に試作した。

このループリックと学修ポートフォリオを使って、高田短期大学では平成27年12月と平成28年3月、名古屋女子大学短期大学部では平成28年1月にサービスラーニングにおける「汎用力」の測定・評価を行い検討したので、その結果を本稿で考察するとともに、活動内容の異なる2つの学習から共通する項目を抽出し、いわゆるコモンループリックを試作し、次の実践研究への基礎資料とする。

2. 方法

サービスラーニングにおける「汎用力」の測定・評価を行うために試作したループリックと

汎用力について 次の知識や技能を活用する場があったか		評価の指標		評価者		評価者	
		期待する能力	期待する能力	期待する能力	期待する能力	期待する能力	期待する能力
文化・芸術等を通じた相互理解の促進する能力	1) 自分からやり始める能力	1) 自分からやり始める能力	1) 自分からやり始める能力	A	4		
	2) 相手の立場に立って話ができる能力(会話力)	2) 相手の立場に立って話ができる能力(会話力)	2) 相手の立場に立って話ができる能力(会話力)	A	4		
	3) 相手の話を理解する能力(聞き取り)	3) 相手の話を理解する能力(聞き取り)	3) 相手の話を理解する能力(聞き取り)	A	4		
	4) 相手の話を理解する能力	4) 相手の話を理解する能力	4) 相手の話を理解する能力	A	4		
	5) 情報を収集、加工、整理し、わかりやすく伝える能力	5) 情報を収集、加工、整理し、わかりやすく伝える能力	5) 情報を収集、加工、整理し、わかりやすく伝える能力	B	3		
	6) 数量の把握や計算する能力	6) 数量の把握や計算する能力	6) 数量の把握や計算する能力	D	1		
人間関係形成調整能力	7) 他人がいじめられるのを助ける能力	7) 他人がいじめられるのを助ける能力	7) 他人がいじめられるのを助ける能力	A	4		
	8) 他人と一緒に協力して活動ができる能力	8) 他人と一緒に協力して活動ができる能力	8) 他人と一緒に協力して活動ができる能力	A	4		
自律的に行動する能力	9) 活動全体の目標や自分の役割を把握し活動できる能力	9) 活動全体の目標や自分の役割を把握し活動できる能力	9) 活動全体の目標や自分の役割を把握し活動できる能力	B	3		
	10) 自分ができること、できないこと、必要なことがある能力	10) 自分ができること、できないこと、必要なことがある能力	10) 自分ができること、できないこと、必要なことがある能力	C	2		
新しい取り組みをする能力	11) 今できる仕事を見つけて主体的に活動しようとする意欲	11) 今できる仕事を見つけて主体的に活動しようとする意欲	11) 今できる仕事を見つけて主体的に活動しようとする意欲	A	4		
	12) プロジェクトを進めようとする意欲や実行力	12) プロジェクトを進めようとする意欲や実行力	12) プロジェクトを進めようとする意欲や実行力	B	3		
	13) 自ら進んで人に聞いたり、聞いたりする能力	13) 自ら進んで人に聞いたり、聞いたりする能力	13) 自ら進んで人に聞いたり、聞いたりする能力	B	3		
考えぬく能力	14) 新しい物事に興味関心をもち、創造する能力	14) 新しい物事に興味関心をもち、創造する能力	14) 新しい物事に興味関心をもち、創造する能力	B	3		
	15) 課題や問題を解決していく力	15) 課題や問題を解決していく力	15) 課題や問題を解決していく力	C	2		
	16) 課題や問題点を発見する力	16) 課題や問題点を発見する力	16) 課題や問題点を発見する力	C	2		
	17) 論理的・ものごとを考える力	17) 論理的・ものごとを考える力	17) 論理的・ものごとを考える力	D	1		
チームで働く力	18) 標準的な手順を守る力(就業規則など)	18) 標準的な手順を守る力(就業規則など)	18) 標準的な手順を守る力(就業規則など)	B	3		
	19) グループ活動を盛り上げるために役割分担をする力	19) グループ活動を盛り上げるために役割分担をする力	19) グループ活動を盛り上げるために役割分担をする力	B	3		
	20) 決断を迅速にして意思決定する力	20) 決断を迅速にして意思決定する力	20) 決断を迅速にして意思決定する力	B	3		
	21) リーディング、人並み以上に働く力	21) リーディング、人並み以上に働く力	21) リーディング、人並み以上に働く力	C	2		
	22) 心の負担やストレスをコントロールして活動を継続する力	22) 心の負担やストレスをコントロールして活動を継続する力	22) 心の負担やストレスをコントロールして活動を継続する力	C	2		

図1 汎用力評価用ループリック：期待度・得点は事前アンケート調査結果から算定¹⁾

した活動の内容、自分の担当した内容に加え、事前アンケート結果から得た16項目の自己評価、汎用力に対する総合自己分析と振り返り、専門能力に関する振り返りを記載する形とした (図3)。

3. 結果

3.1 実践結果 (高田短期大学)

平成27年12月20日にシニアパソコン教室および平成28年3月6日にはパソコン指導ボランティア養成講座を実施し、ボランティアスタッフ8人、主催者 (公民館) 1人、担当教員1人で学生の評価を行った。具体的には、留学生1人含めて7人に対し、スタッフ7人が、1人で2人 (学生1人につき2人が評価)、主催者 (公民館) は学生全員を観察対象とした。評価者に対するループリックを用いた評価後のアンケートで記載された主な意見を以下に示す。

- ・学生を観察する時間がない、あるいははっきり観る機会が少ない (それぞれが受講生に対応しているため)
- ・評価の基準がわからない
- ・わかりやすかったものの、カテゴリーとしては少ないが、それぞれの発揮した能力を選ぶことになるので、全体として項目が多く感じた。
- ・評価者の問題として、あまりにも評価する人のレベル (専門レベルというより、汎用能力レベルといった方がよい) が異なり、評価者の差が問題と感じた。

例えば、全員にコメントを書くことができるくらいのレベルから、観察できない項目にも◎印が付けられているいい加減さがあったり、きちんと○印を付けることができないスタッフが何人かあった。

また、評価者の評価に費やした時間は平均35分で、その負担感とループリックの分かりやすさについての質問結果を図4に示す。負担感が「なかった」「あまりなかった」の回答は少なく、「あった」「少しあった」が多く、その意見を以下に示す。

- ・名前がわからない。2人で行うので、どちらがという評価がしにくかった。
- ・観る時間が少なかった (席がはなれていて) ので判断しづらかった。
- ・学生 (講師役) の方がすぐ近くではなかったため、評価しにくい面があった。
- ・本人の活動の詳細を見ていられなかったことが負担感となった。
- ・評価 (観察) している時間があまりなく、評価中心ではないので、評価される側に対して、失礼だという負担 (負目) があった。

- ・感覚、直感で判断した部分があるので、評価に (自信が) 責任がもてない。担当教員として、評価している時間がないこと、講師役は状況がみられるが、横についてのスタッフとして実施している様子は見ることができな

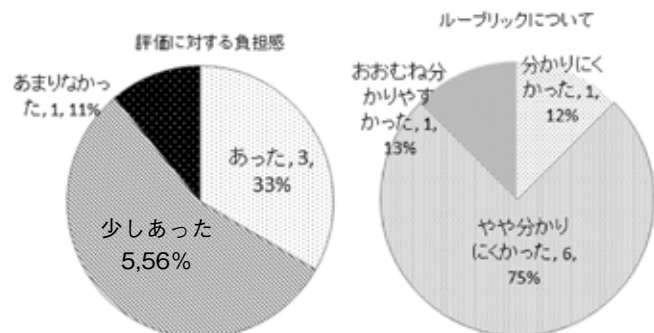


図4 評価に対する負担感、評価項目の分かりやすさ

い。反省会での発言は学生の振り返りの状況がよくわかるが、意見を聞くことに集中し、評価を一人ひとり詳細にすることが難しいと感じた。

ループリックの分かりやすさについて、「分かりにくかった」「やや分かりにくかった」と回答した人が記載した意見を以下に示す。

- ・項目が多く、マッチしているか。個人についてわからないので評価がしにくい。
- ・細かすぎる（2）

また、学生が地域社会において大学で学んだ知識や技術をもって貢献活動やボランティア活動を行った場合、学生個々の活動状況を評価し学生にフィードバックすることについて必要があるかの観点からは、「必要がある」と回答した人がほとんどであったが、「学んだ知識を活用するには、機会や社会経験の積み重ね、人とのかかわりなど様々な要素が関連していて項目ごとに評価するのになじまないと思った。」や「学生の活動に対する意欲、問題を見つけ、解決に向けてどう考え、人と関わり、どう自己評価し、次への意欲につなげたかを学生自身が気づけることが大切だと思った。」「自分の行動が、他人からどの様に見られているのか、自覚する上に必要だと思う。」との意見が付与されていた。

評価のしにくい項目についての意見は多くなかったが、6番、14番、17番が2人から、10番、15番、16番、22番が1人から挙げられた。

評価者の評価後の主な感想を以下に示す。

- ・人を評価するのは大変難しいです。
- ・普段接していない学生に対して本人の努力などを観るものもないので、今日は頑張っていたのに、評価してあげられなかったら残念ですみません。
- ・自分のその場での立ち位置が自覚出来、より上を目指そうとする意欲を持たせるためにもいいと思います。
- ・評価する側の理解度が低いので、短期間で評価するのも難しい。
- ・評価される側も、きちんと把握されていないうえでの評価は、不満が残ると思います。
- ・ループリック評価自体は、素晴らしいものかもしれないが、今回において、評価項目は、限定した範囲にし、他からの利用のものであっても、変更して、焦点を絞ってほしいと思います。
- ・私たちの評価は、参考程度であると思われるが、ばらつきが出るので、全員（評価する方）が、全員（評価される方）を見られる項目に絞った方がよいと思います。

平成28年3月6日の活動は、援助役と講師役の両方をそれぞれの学生が務めた平成27年12月とは異なり、学生は、講師役をせず援助役のみの役割であった。参考として、ひとりの学生の学修ポートフォリオ（図5）、自己分析（図6）を例として示す。

これら2回の実践を通して、指導教員、スタッフから寄せられたコメントを以下にまとめておく。

（1）担当教員

- ・今回の活動では評価しにくい。
- ・自己評価が良い項目がある。
- ・汎用的能力についても、活動によって評価できない項目がある。
- ・反省会での自己の活動の振り返り発言や自己評価レポートでの具体的活動に対しての評価が可能と感じた。
- ・隣に寄り添ってのマンツーマンでの対応の活動で、詳細な様子、発言している言葉などを聞

学修ポートフォリオ		種類	得意	12月20日						3月6日									
				自己評価		スタッフ評価		結果		自己評価		スタッフ		スタッフ		研究者		結果	
				評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント
汎用力について 次の大域で目標を達成する事ができたか		1 5か10で目標を設定する力	A	4	◎			◎											
		2 4か5か10で目標を設定する力(会話力)	A	4	◎			◎											
		3 目標とする能力(話を聞こうとする姿勢)	A	4	◎			◎											
		4 相手の話を理解する能力	A	4	◎			◎											
		5 情報収集、加工、整理し、わかりやすく伝える能力	B	3															
		6 要旨の把握や分類する能力	D	1															
人間関係の構築能力		7 他人と1対1で関係を築く力	A	4	◎			◎											
		8 他人と一緒に協力して作業ができる力	A	4	◎			◎											
自律的に行動する能力		9 活動全体の進捗や自分の役割を把握し、調整できる力	B	3				◎											
		10 自分ができること、できないこと、必要なのは誰か	C	2															
前に踏み出す力		11 4か5か10を基準と見つけ、具体的に行動しようとする意欲	A	4															
		12 プログラムが達成しようとする意欲の裏付け	B	3				◎											
		13 自ら進んで人に問いかけたり、届いたりする力	B	3					◎										
考えあぐさ		14 新しい物事に興味心を持ち、探索する力	B	3															
		15 課題や問題を解決している力	C	2				◎											
		16 課題や問題を発見する力	C	2					◎										
		17 課題的にものを考える力	D	1															
		18 課題的な問題を発見し、解決しようとする意欲	B	3					◎										
チームで働く力		19 グループ活動の進行や目的を把握し、調整できる力	B	3	◎			◎											
		20 会議を促進して参加を促す力	B	3	◎			◎											
		21 ソードシップ、人脈を伸ばしていく力	C	2	◎				◎										
22 目的意識やモチベーションを高め、活動継続する力	C	2	◎																

図5 ひとりの学生の学修ポートフォリオ例

自己分析	12月20日	3月6日	変化
1 大学で学んだ知識が活かされた(知識)	5	4	◎-1
2 大学で学んだ技能が活かされた(技能)	5	4	◎-1
3 知能との成長のきっかけになった	5	3	◎-2
4 将来仕事を進めて人の役に立ちたいと思った	4	3	◎-1
5 知能や社会の課題に関心が持てた	3	3	◎0
6 競争に勝つだけでなく自分の強みを知りたいと思った	3	4	◎+1
7 課題に果敢と挑戦し、解決しようと思えるようになった	3	3	◎0
8 周りの意見を重視し、調整しながら仕事をすすめていけるようになった	3	3	◎0
9 果敢と対案性を発揮して行動することができるようになった	3	3	◎0
10 この経験によって大学の事が好きになった	3	3	◎0
11 学業に必要単位を確保している、今後、専攻の関心のある分野に進もうとしている	3	3	◎0
12 自分と異なる考えや価値観を尊重することができた	2	3	◎+1
13 大学の教員の方で主体的に学べるようになった	2	3	◎+1
14 大学の学目的が明確になり、目的意識が強くなった	1	3	◎+2
15 自分の事は自分で決められるようになった	2	3	◎+1
16 専攻で人生を切り開いていけるように感じた	2	3	◎+1
汎用力(ジェネリックスキルズ)に対する総合自己分析と振り返り	自律的に行動する力、前に踏み出す力、考え抜く力などはまだ伸ばさないと感じた		できる力が「できて当たり前」でOKで「よしよし」な自信を返していた。←良かったと思う できるだけ頑張っていた←良かったと思う 課題、あいづちを通して友好的な関係を築けた。←良かったと思う
専門能力に関する振り返り	大学入学前までわからなかった知識や専攻で必要になるものになったりして、成長しているのではないかと勝手に思い、嬉しいと思う。まだまだ、先生が教えてくれる範囲に「わあ」と驚かされることもあるので、知らない知識がたくさんあるから、これからも勉強できたらと思う。		

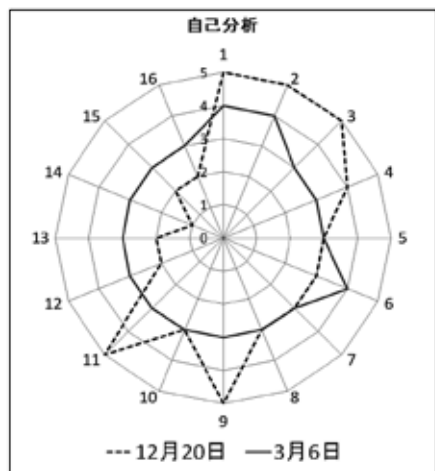


図6 ひとりの学生の自己分析例

き取ることができないため、評価が難しい。

- ・スタッフ自身も活動を抱えているため、リアルタイムに評価することができない。
- ・活動すべてを観察して、評価することは不可能であり、どうしても観察できない部分が多くでてくる。自己評価や受講者そのものに聞く、などが必要であろうか。ただ、受講者の場合は、ばらつきがどうしても出てくる。
- ・スタッフの評価能力差が大きい。ある程度人選はすべきである。

(2) スタッフ

- ・学生の行動に対してどの評価項目にあてはまるのかがわかりにくく、どこに書いてよいかわからなかった。
- ・名前がわからず対象者がわからない。
- ・観察する時間がない。
- ・観察をしっかりとしていない中で評価をするというのは、失礼になる。
(評価の確からしさに不安があるようだ。)
- ・反省会でも話の内容に集中するので、評価を詳細にすることは難しい。
- ・専門能力は評価が難しい。担当する部分によって評価する機会が異なるのはどうか。
- ・評価対象となる項目とそうでない項目があり、その判別が難しい。
- ・評価の基準がはっきりしない。どの程度をよしとするか。
(評価するスタッフのレベルによっても大きなばらつきがあった)
- ・学んだ知識を活用するには、様々な要素が関連しており、項目ごとに評価するのはなじまないと感じた。具体的な行動で評価するべき。
- ・学生自身が気づけることが重要だと感じた。
- ・発揮できたかどうかという視点であったが、より具体的な表現であればいい。
- ・評価項目が多すぎる。活動に関わるものだけに絞る。
- ・評価基準の表現の仕方でニュアンスが異なり、評価しにくい。
- ・受講者が理解できたか、というのを聞いていないので評価しにくい。
- ・本人の努力をみるものがないので、学生に申し訳ない。
- ・評価の基準が問題。評価者のばらつきも問題、絶対的な表現が必要である。

評価方法に関して言えば、評価を実施するにあたって、誰が誰を評価するかを整理して、評価票を人数分渡し、趣旨やその内容基準等について説明を事前しておく必要がある。当日は、活動の運営で忙しく、実施の依頼や評価票を渡すことも大変な状況にある。また、スタッフは現実の運営に力を注いでおり、リアルタイムに学生を観察することが難しい。準備の状況や片づけ、反省会、昼の講座受講者との対話などを通じて活動に対する取り組み姿勢などが良く見えるので、こうした場面の評価も大事である。評価者によっては、見ている人と、まったく評価は考えていない人がいた。複数名で評価しなければ、評価の信頼度をあげることはできない。しかし、その前に評価者そのものの人選をしっかりとっておかないと評価の信頼性が低くなる。また、分担することで評価のばらつきがでてくる。平成28年3月の活動では、当事者ではなく、研究者としての観察も実施している。そこから見えてくる課題として以下にまとめておく。

- ・実際に作業し働いているスタッフ（情報ボランティアや主催者）にとってはすべての学生の観察には無理がある。
- ・指導教員についても、地域にスタッフとともに作業している状況では難しい面があるが、学

生の顔や大学内での様子、あるいは、学力レベルを把握しているので、基準が明確になると考えられるので、学生全員の観察は比較的負担にはならないと思われる。

- ・観察者は、活動には直接関わっていないため、活動の内容や進行についても観察できるとともに、学生の学修状況の測定や評価はしやすい。しかし、細かく観るには、学生の名前と顔のほか、大学での状況を事前に知っておくと、基準が見極めやすい。しかし、絶対値としては示せず、相対値としての要素が強くなる。観察する学生数として10人を超えると困難度が増す。

行動観察によって行う評価は定量化が難しいため、ルーブリックという評価指標（おおむね絶対値）があると基準が見極めやすく、複数の評価者による場合にあっても評価の平等性が保てると言える。しかしながら、ルーブリック評価だけでは不十分で、学生の振り返りによる過去の自分との比較や、自身の向上感が認識できる学修ポートフォリオも重要となってくる。たとえば、学生自身が、「向上した」「向上しなかった」「身に付いた」「あまり身に付かなかった」など、過去の自分との比較ができることなどは重要な点である。

サービスマーケティングを導入している、しつとある大学は増えていくと考えられる。しかしながら、実際に学修成果を測定するなどの効果検証まで考慮した授業設計は難しい面があると考えられる。社会貢献活動そのものの計画、学生の参加などについては、これまでの蓄積もあり、比較的授業デザインは容易であろうが、学修成果を可視化していくことは難しい。評価者、学生ともに、汎用力はどのような能力かを把握し、学生の活動と学生のその時点の能力に即した規準の設定が重要であるとともに、評価の方法の工夫が必要である。本実践から見えてきたひとつの課題解決策として以下にまとめておく。

- ・ルーブリックでは、汎用力についてのコモングルブリックを作成し、これに活動内容に合わせた評価項目を付加する。基準としては、学生の実態に合わせ、具体的に活動のなかでの振る舞いを記載し、どのようなことができているか、質問をしっかりと聞いて、分かりやすく答えているかなどが考えられる。
- ・学修ポートフォリオに関して、特に学生の変容を自己認識できるようにする項目を追加する。たとえば、大学で学んだことで社会貢献できたか、汎用力のどの部分が特に身に付いたか、向上したかなどが考えられる。
- ・評価者の評価方法(主催者、スタッフ、担当教員、観察者の学生の受け持ち範囲)を明確化する。
- ・学生の状況(顔写真、名前、大学での様子など)を事前に知らせておく。
- ・評価者へマニュアルを配布 または、事前説明会を丁寧実施する。

3.2 コモングルブリックの試作

前項では高田短期大学における実践結果を述べたが、名古屋女子大学短期大学部での正課授業「地域貢献演習」でも同様のルーブリックと学修ポートフォリオを使って実践研究を行っている。名古屋女子大学短期大学部は、

表1 評価項目の重要度と評価結果との相関(高短)

	2016.12.20		2016.3.6		
	得点(重み)	自己評価(人数)	評価者(評価できた学生数)	自己評価(人数)	評価者(評価できた学生数)
1) 分かりやすく説明する力	4	2	4	4	4
2) 相手に応じた話ができる能力(会話力)	4	4	3	4	4
3) 傾聴する能力(話を聞くときの姿勢)	4	4	4	4	4
4) 相手の話を理解する能力	4	3	4	4	4
5) 情報を収集、加工、整理し、わかりやすく表現する力	3	2	3	2	1
6) 数量の把握や計算する能力	1	0	0	0	0
7) 他人とよい関係を作る力	4	2	4	4	3
8) 他人と一緒に協力して活動ができる力	4	2	4	2	4
9) 活動全体の意義や自分の役割を理解し活動できる力	3	3	4	3	4
10) 自分ができること、できないこと、必要性などが言える力	2	1	3	2	4
11) 今できる仕事を発掘し主体的に活動しようとする意欲	4	2	3	2	3
12) プランニング活動を取り上げられる意欲や実行力	3	0	2	1	3
13) 自ら進んで人に問いかけたり、聞いたりする力	3	2	3	3	3
14) 新しい物事に興味関心を持ち、創造する力	3	0	1	1	2
15) 課題や問題を解決していく力	2	1	2	2	4
16) 課題や問題を発見する力	2	2	2	2	3
17) 論理的にものごとを考える力	1	0	1	0	1
18) 規律などを遵守する力(約束ことなどを守るなど)	3	2	4	3	4
19) グループ活動を盛り上げるために雰囲気を作る力	3	2	2	3	3
20) 状況を把握して柔軟に対応する力	3	3	3	4	4
21) リーダシップ、人を引っ張っていく力	2	1	0	1	0
22) 心の負担やストレスをコントロールして活動を継続する力	2	2	3	2	1
相関係数		0.65	0.74	0.75	0.60

ファッションデザインと広報デザインプロジェクト、ファッションデザイン染色プロジェクト、ファッションデザインクリエイティブプロジェクトの3つのプロジェクトを設定し、草木染を用いたハンカチ、コースター、ポーチなどの染色作品の制作や古着のリメイクを通して、地域貢献行事を企画立案し、その上で地元行事と係わり、お年寄りや子供たちとのコミュニケーションや、作品の即売等を行う活動であった。高田短期大学とは、活動内容、学生の関わり方などが異なるため、汎用力として22の項目のすべてが適用できるとは限らない。そこで、これら2つの異なる活動から汎用力として共通する項目を抽出して、いわゆるコモングルックを試作し、平成28年度の実践研究の基礎資料とすることとした。

(1) 高田短期大学

学修ポートフォリオおよび自己分析シートのなかで、平成27年12月時点ですべての項目に同じ評価点を付けた学生があったため、これを除く信頼できる4人の学生に絞って結果を示す。汎用力22項目について4点～1点で得点化した重み¹⁾と自己評価ができていた学生数との相関、および、スタッフや教員が評価できていた学生数との相関を表1に示す。平成27年12月と平成28年3月の実践ともに、事前調査(重要度)との相関は比較的強いと考えられることから、事前調査として評価項目の重要度、学生の実態、評価者の状況を把握しておくことが大切だと分かる。

また、評価項目としてとりあげた22項目のうち、今回の活動では発揮できない評価項目があったため、学生が自己評価をすることができなかつたり、評価者が学生の活動の全ての観察はで

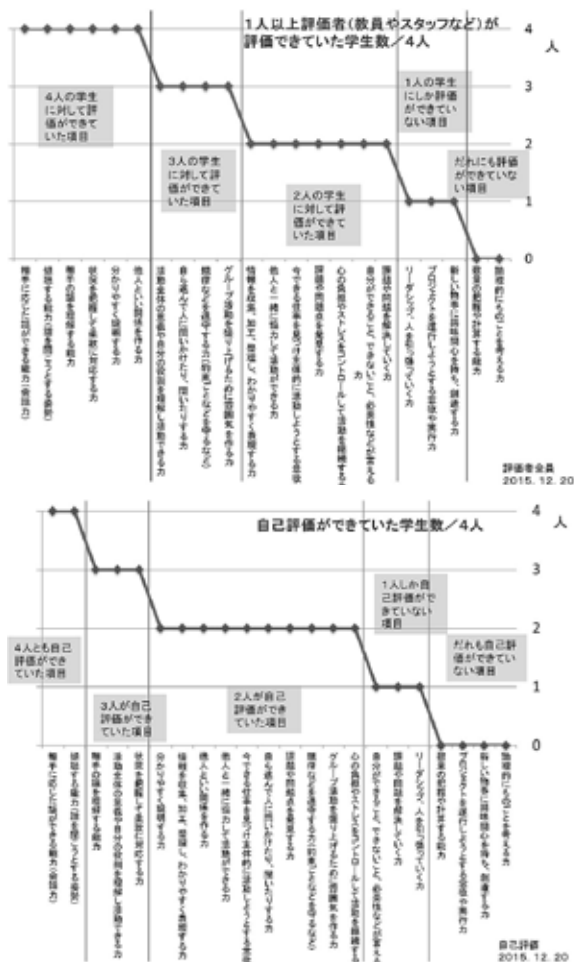


図7 高短：(上) 評価者が項目毎に評価できた学生数(多い順)、(下) 項目毎に自己評価ができていた学生数(多い順)

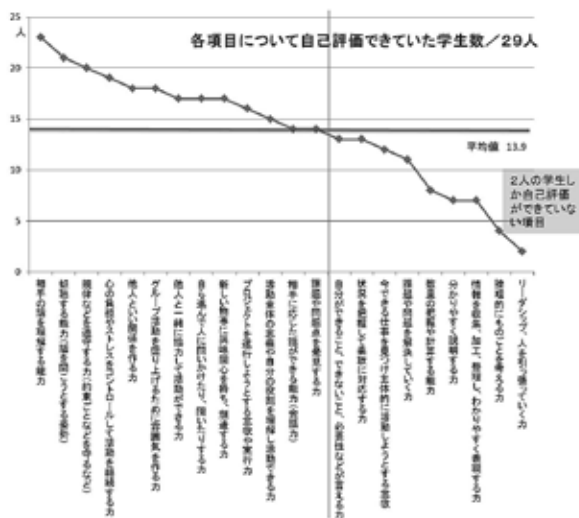
表2 評価項目の重要度と評価結果との相関(女短)

	重み	自己評価が出来ていた学生数	教員が評価できていた学生数
1 分かりやすく説明する力	4	7	19
2 相手に応じた話ができる能力(会話力)	4	14	26
3 傾聴する能力(話を聞くときの姿勢)	4	21	22
4 相手の話を理解する能力	4	23	27
5 情報を収集、加工、整理し、わかりやすく表現する力	3	7	8
6 数量の把握や計算する能力	1	8	18
7 他人と良い関係を作る力	4	18	22
8 他人と一緒に協力して活動ができる力	4	17	21
9 活動全体の意義や自分の役割を理解し活動できる力	3	15	24
10 自分ができること、できないこと、必要性などが見える力	2	13	17
11 今できる仕事を見つけ主体的に活動しようとする意欲	4	12	15
12 プロジェクトを遂行しようとする意欲や実行力	3	16	23
13 自ら進んで人に問いかけたり、聞いたりする力	3	17	22
14 新しい物事に興味関心を持ち、創造する力	3	17	15
15 課題や問題を解決していく力	3	11	23
16 課題や問題点を発見する力	2	14	15
17 論理的にものごとを考える力	1	4	11
18 規律などを遵守する力(約束ごとなどを守るなど)	3	20	26
19 グループ活動を盛り上げるために雰囲気を作る力	3	18	14
20 状況を把握して柔軟に対応する力	3	13	23
21 リーダシップ、人を引っ張っていく力	2	2	2
22 心の負担やストレスをコントロールして活動を継続する力	2	19	20
	相関係数	0.49	0.70

きないので、評価できない項目があった。そのため、評価できていた学生（3段階で◎または○を付けた学生）数の多い項目順を図7に示す。図のなかで、たとえば「分かりやすく説明する力」については、この項目を自己評価できた学生が2人/4人、観察評価ができていた評価者が4人/4人となっている（平成27年12月）。

評価者は学生の観察評価、学生は自己評価を行ったが、観察可能、あるいは、自己評価が可能だった項目は、個々に異なる。平成28年度では、これらの結果をもとに、学生が自己評価できていた人数が1人以下、評価者が評価できていた人数が1人以下の項目で、平成27年12月と平成28年3月に共通する次の項目を外すこととした。

- ・数量の把握や計算する能力
- ・自分ができること、できないこと、必要性などが言える力
- ・プロジェクトを遂行しようとする意欲や実行力
- ・新しい物事に興味関心を持ち、創造する力
- ・課題や問題を解決していく力（学生と教員評価に残す）
- ・課題や問題点を発見する力（学生と教員評価に残す）
- ・論理的にものごとを考える力
- ・リーダーシップ、人を引っ張っていく力
- ・心の負担やストレスをコントロールして活動を継続する力



(2) 名古屋女子大学短期大学部

地域貢献演習では学生の参加が29人と多いこと、また、ループリックによる評価は指導教員のみという形で実施している。高田短期大学の場合と同様に、汎用力22項目について、4点~1点で得点化した重み¹⁾と自己評価ができていた学生数との相関、および、教員が評価できていた学生数との相関を表2に示す。自己評価できていた学生数との相関がやや弱い。次に、評価者が評価できた学生数の多い項目順を図8に示す。平成28年度では、学生が自己評価できていた人数および、教員が評価できていた人数がともに平均値を下回る下記の5項目を外すこととし

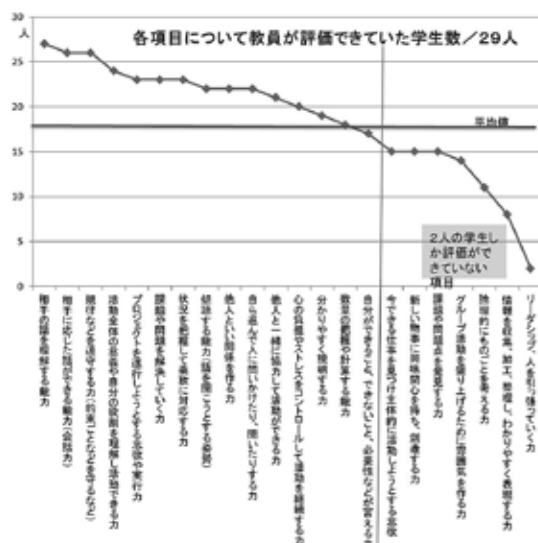


図8 名女短：(上) 評価者が項目毎に評価できた学生数(多い順)、(下) 項目毎に自己評価ができていた学生数(多い順)

た。

- ・ 情報を収集、加工、整理し、わかりやすく表現する力
- ・ 今できる仕事を見つけ主体的に活動しようとする意欲
- ・ 課題や問題点を発見する力
- ・ 論理的にものごとを考慮する力
- ・ リーダシップ、人を引っ張っていく力

表3 検討用コモンルーブリックのための基礎項目（例）

		重み順
文化技術等を相互作用的に活用する能力	分かりやすく説明する力	A
	相手に応じた話ができる能力(会話力)	A
	傾聴する能力(話を聞く姿勢)	A
	相手の話を理解する能力	A
人間関係形成調整能力	他人と良い関係を作る力	A
	他人と一緒に協力を活動ができる力	A
自律的に行動する能力	活動全体の意義や自分の役割を理解し活動できる力	B
前に踏み出す力	自ら進んで人に問いかけたり、聞いたりする力	B
	規律などを遵守する力(約束ことなどを守るなど)	B
チームで働く力	グループ活動を盛り上げるために雰囲気を作る力	B
	状況を把握して柔軟に対応する力	B
考えぬく力	課題や問題を解決していく力	C

高田短期大学および名古屋女子大学短期大学部におけるこれらの実践結果から、2つに共通しており、重要度（重み）の高い項目順に精選した6カテゴリー12項目（表3）をコモンルーブリックの目安として検討していく。なお、今回の実践において得られた評価者からのコメント内容、例えば、「文化技術等を相互作用的に活用する能力」の4つの項目が似ていて区別がしにくいなどがあり、項目の精選や表現についても検討し、次の実践研究を経て検証していく予定である。

4. 考察

サービラーニングを通した汎用力（ジェネリックスキルズ）の育成に関しその評価についての実践的研究として、ひとつは高田短期大学・キャリア人材育成学科の情報ボランティア（シニアパソコン教室）、もうひとつは、名古屋女子大学短期大学部生活学科の地域貢献演習である。これらの活動内容は異なるため、汎用力と一口で言っても重点とされる能力は異なる。平成27年度における実践研究では、まず、アンケート調査を実施し、汎用力のうち、地域の主権者、学生を指導している教員、そして、学生の3者がもっとも必要としている能力を、OECDのキー・コンピテンシー、経済産業省の社会人基礎力、文部科学省の学士力に示されている項目から22項目に集約した。同時に、重要度を評価時点での重みとして点数化することも含み、評価用のルーブリック、学生の自己評価用としてこのルーブリックをもとにした学修ポートフォリオを試作

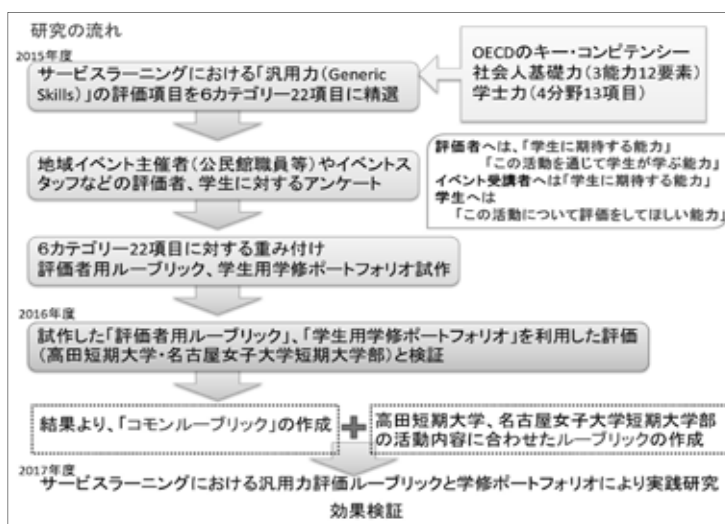


図9 これまでの研究の流れと今後の計画

し実験的に使用した。結果を踏まえ、活動内容の異なる学習から、共通する「汎用力」を抽出し、いわゆるコモンルーブリックの試作へと進めていく (図9)。

ルーブリックによる評価は、アメリカでは、その歴史は比較的長く、4年間の学部教育全体を通して身に付ける必要のある基本的な能力について、15領域に対応し作成されたバリュールーブリック ((Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education Rubric 表4) が作られている¹¹⁻¹²⁾。

これらの能力は、学部4年間を通して身に付けていく力を評価するためのひとつの基礎となると考えられている。実際には、共通教育、専門教育、あるいは、講義、演習、実習などの授業形態区分に合わせたアレンジが必要となる。同時に、横軸に汎用力、縦軸に系統的に配置された科目に示したマトリクス形式のカリキュラムマップをも作成すると、その価値は高まると考えられる¹³⁾。

ルーブリック評価の基礎¹⁴⁾を踏まえ、アメリカのバリュールーブリックや、学力の3要素についての一般的ルーブリックやアカデミックスキルズなどのルーブリックの事例¹⁵⁻¹⁷⁾などを参考にしつつ、サービラーニングにおける汎用力 (ジェネリックスキルズ) に関する一般的ルーブリックの作成に向け、本研究の結果もひとつの基礎資料として役立てば幸いである。

なお、本研究は、科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) 基盤研究 (C) 一般 課題番号 15K04259 によるものである。

参考文献

- 1) 白井靖敏、鷲尾敦、原田妙子、サービラーニングにおける学修成果の可視化に向けた取組、名古屋女子大学 紀要 第62号 P141-151、(2016)
- 2) 鷲尾敦、白井靖敏、サービラーニングによる学修評価指標の検討、日本教育工学会第31回全国大会論文集、P809-811、(2015)
- 3) 桜井政成、地域活性化ボランティア教育の深化と発展：サービラーニングの全学的展開を目指して、立命館高等教育研究第7号、P21-40、(2007)
- 4) 山田礼子、コミュニティ問題を改善しながら理論を学ぶ、カレッジマネジメント147、P70-73、(2007)
- 5) 原田妙子、短大での地域貢献演習、PBLの取り組み、平成25年度東海地区大学教育研究会研究大会シンポジウム資料、(2013)
- 6) 鷲尾敦、アクティブラーニングを取り入れた情報ボランティア育成講座の設計、日本教育工学会第30回全

表4 Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education Rubric

○知的・実践スキル (Intellectual and Practical Skills)
・探求と分析力 (Inquiry and analysis)
・批判的思考力 (Critical thinking)
・創造的思考力 (Creative thinking)
・文章作成力 (Written communication)
・口頭伝達力 (Oral communication)
・読解力 (Reading)
・量的分析リテラシー (Quantitative literacy)
・情報リテラシー (Information literacy)
・チームワーク (Teamwork)
・問題解決力 (Problem solving)
○個人的社会的責任感 (Personal and Social Responsibility)
・市民としての知識と責務 (Civic knowledge and engagement--local and global)
・異文化間の知識と能力 (Intercultural knowledge and competence)
・倫理的思考力 (Ethical thinking)
・生涯学習に対する基盤と能力 (Foundations and skills for lifelong learning)
○学習の統合 (Integrative Learning)
・学習の統合 (Integrative Learning)

- 国大会論文集、P285-286、(2014)
- 7) 経済産業省、<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>
 - 8) 原田妙子、渋谷寿、開かれた地域貢献事業（平成25年度）名古屋市瑞穂保健所・瑞穂児童館との交流事業、名古屋女子大学総合科学研究 第8号 P109-117、(2014)
 - 9) Definition and Selection of Competencies (DeSeCo)、<http://www.oecd.org/edu/skills-beyond-school/definitionandselectionofcompetenciesdeseco.htm>
 - 10) 文部科学省、「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申、(2008)
 - 11) VALUE Rubric Development Project, Association of American Colleges & Universities、<http://www.aacu.org/value/rubrics>
 - 12) 安藤輝次、一般的ルーブリックの必要性、奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター教育実践総合センター研究紀要17号、1-10、(2008)
 - 13) 濱名篤、ルーブリックを活用したアセスメント、中央教育審議会高等学校教育部会資料、(2012)
 - 14) Dannelle D. Stevens, Antonia J. Levi、(佐藤浩章監訳)、大学教員のためのルーブリック評価入門、玉川大学出版部、(2014)
 - 15) 山田嘉徳、森 朋子、毛利美穂、岩崎千晶、田中俊也、学びに活用するルーブリックの評価に関する方法論の検討、関西大学教育開発支援センター関西大学高等教育研究 第6号、21-30、(2015)
 - 16) 立教大学大学教育開発・支援センター、「学習成果」の設定と評価—アカデミック・スキルの育成を手がかりに—、大学教育開発研究シリーズNO.22、(2015)
 - 17) 葛西耕市、稲垣忠、アカデミックスキル・ルーブリックの開発—初年次教育におけるスキル評価の試み—、東北学院大学教育研究所報告集 12、5-29、(2012)

要約

サービスラーニングを通じた汎用力（ジェネリックスキルズ）の育成に関しその評価について、学生がサービスラーニングを通して得られる汎用力の獲得状況を測定・評価する指標としてルーブリックと学修ポートフォリオを開発した。これらを使って、高田短期大学では平成27年12月と平成28年3月、名古屋女子大学短期大学部では平成28年1月にサービスラーニングにおける「汎用力」の測定・評価を行い検討した。2つの実践は活動内容が異なるので、主催者、活動スタッフ、指導教員、学生が評価出来ていた項目を精査し、共通する項目を抽出し、いわゆるコモンルーブリックを試作し、次の実践研究への基礎資料とした。

